Johann Emerich のミニアチュア・インキュナブラ出版

西川　和　（慶應義塾大学大学院）　nishikaw@keio.jp

Ⅰ　ミニアチュア・インキュナブラ

１．定義

ミニアチュアブックとは小型の本である。そのうち 15 世紀に作られた印刷本(インキュナブラ)をミニアチュア・インキュナブラと呼ぶ [1)]。インキュナブラの中でもサイズが小さいために、印刷や製本に高い技術が必要で、出版目的にも用途にも偏りが見られ、特定の対象読者を意識している物だと考えられる。あまり研究はされていないものの、ミニアチュアブックのコレクターである McMurtrie[1)]や Welsh[2)]などによる研究が行われている。

サイズについての定義はないが、McMurtrie[1)]の研究では 120mm×85mm を基準とした。その際に、再製本されることを考えて印刷面の大きさに注目し、余白を取ったうえで印刷面が 75 mm×56 mm 以下のものと定義した。Welsh[2)]は McMurtrie を参照しつつ、必要な余白はより小さいと考えて印刷面の大きさが 82 mm×56 mm 以下のものを対象とした。これらを参考に、筆者による先行研究 [3)]では判型が 16 折版以下で、外側が 120mm×85mm 以下もしくは印刷面が 82 mm×56 mm 以下のものを対象とした。本研究でも筆者による先行研究の定義を用いる。

２．先行研究

全部で何タイトルあるのかも明らかではないが、McMurtrie[1)]以降、個別の資料や特定の図書館が所蔵している少数のタイトルを対象にした調査が数件行われている。多数を対象にした調査では約 100 タイトルを対象にした Welsh[2)]と、191 タイトルを対象にした筆者 [3)]による先行研究がある。

筆者がインキュナブラ全体と特徴を比較した際には出版地と印刷者が似ていた。出版地別に見ると、インキュナブラ全体でもミニアチュア・インキュナブラでも、国別ではドイツとフランス、都市別ではヴェネツィアのものが最も多い。印刷者はミニアチュア・インキュナブラのみを作っていることはなく、様々な出版活動の一部として作っている。

独自の点としては出版年と内容がある。地域別にみると、インキュナブラの出版よりも始まる時期も広まる時期も遅れている。内容は、普通のサイズのインキュナブラの再版はあまり行わず、小さなサイズと少ない文章量に合わせた内容を選んでいる。2 タイトルを除いて宗教書であり、とりわけ時祷書、聖務日課書、詩編などの実用的な書籍が多く、聖書全体は出版されていないことが特徴的である。インキュナブラ全体での宗教書の比率は 45%程度であり、その中にはかなりの聖書が含まれている。

共通点と差異が同時に見られるのが活字である。多くは他のインキュナブラと同じ活字を用いているが、特に 1490 年代は特有の活字も用いるようになった。

Ⅱ　研究の目的と方法

１．研究の目的

本研究では、筆者による先行研究で最も多くの 12 タイトルのミニアチュア・インキュナブラを印刷したことがわかっているヴェネツィアの印刷業者 Johann Emerich の印刷物を対象とし、どのような印刷技術の特徴があるかと、どのような購入者を想定していたのかを考察することを目的とする。更には購入者がどのような利用をしていたのかも推測する。

Emerich はドイツのシュパイアー近郊のウーデンハイム出身で、15 世紀の末頃から 16 世紀の初頭にかけてミニアチュア・インキュナブラの印刷が盛んなヴェネツィアで印刷をしていた。1480 年代後半には同じくシュパイアーの近く出身の印刷業者 Johann Hamann と共同で印刷をしていたが 1492 年に独立し、その後は主にフィレンツェ出身の書籍商 Lucantonio Giunta の依頼を受けて印刷をしており、Emerich の死後に Giunta が印刷活動を引き継いだようだが、没年ははっきりしない [4)]。彼の印刷した 72 タイトルのインキュナブラのうち、約 3 分の 2 は 4 折版と 8 折版であり、ミニアチュア・インキュナブラのみを印刷していたわけではない。彼の印刷物の内容は宗教書が中心で俗書は 1 タイトルしかなく、3 分の 1 近くには高い技術が必要な楽譜が含まれているのが特徴的である [5)]。更に出版物の多くが時祷書、聖務日課書、詩編、ミサ典書であり、ミニアチュア・インキュナブラの縮図と考えることが出来る。

２．研究方法

まず目録を調査する。Incunabula Short Title Catalogue (ISTC)[6)] や Gesamtkatalog der Wiegendrucke (GW)[7)]、ヴェネツィアの出版物をまとめた Les livres à figures vénitiens de la fin du XVe siècle et du commencement du XVIe (Essling)[8)]などのインキュナブラの総合目録と、Catalogue of books printed in the XVth century now in the British Museum (BMC)[9)]などの個々の収蔵館の目録を用いた。活字の種類、2 色刷りの方法、挿絵の有無などから技術を、内容から想定読者を考察する。

第 1 表　Emerich の出版したミニアチュア・インキュナブラ

ISTC No.	タイトル	出版日	判型	版面の高さ（mm，括弧内は推定）	木版数	行数	最小の活字（20 行当たり mm）
ib01142600	Breviarium Fratrum Praedicatorum. Ed: Thomas Donatus	25 Dec. 1492	16°	78		34	46
ih00373300	Horae: ad usum Romanum (Rome)	6 May 1493	32°	(50.4)	5～	15-16	63
ib01122950	Breviarium Romanum (Franciscan usage) (Ed: Ludovicus Brognolus)	27 Mar. 1494	16°	(80.5)		35	46
ih00377300	Horae: ad usum Romanum (Rome)	30 Nov. 1494	16°	73	7	16-17	85
ip01054000	Psalterium	12 Feb. 1495/96	16°	45			
ih00378700	Horae: ad usum Romanum (Rome)	31 July 1496	24°	(67.6)	6	25-26	52
ih00379100	Horae: ad usum Romanum (Rome)	31 Aug. 1496	32°	(36.3)	6	11	66
ih00383200	Horae: ad usum Romanum (Rome)	9 May 1497	32°	(62.7)	6	16-19	59
ih00388800	Horae: ad usum Romanum (Rome)	31 Aug. 1497	16°	(78.2)	6	16-17	92
ih00395500	Horae: ad usum Romanum (Rome)	30 Sept. 1498	16°	(73.6)	6	16	92
ih00399800	Horae: ad usum Romanum (Rome)	21 May 1499	64°	(36.8)	6	16	46
ip01058500	Psalterium	[about 1500]	32° or 16° or 8°	55	1	18	58

次に実際に個々の資料がどのように使われていたのかを調査するため、デジタル画像を収集して現状を調査する。現存する Emerich の出版物のうち 15 タイトルはデジタル画像が公開されているが、そのうちミニアチュア・インキュナブラは 1 タイトルのみである。そこで、所蔵館に問い合わせてデジタル画像を取り寄せた。

Ⅲ　調査結果

1．全体像

Emerich の印刷したミニアチュア・インキュナブラが 12 タイトル 18 点見つかった。タイトル別の情報を第 1 表にまとめた。最も古いものは 1492 年 12 月 5 日で、彼は独立した年のうちにミニアチュア・インキュナブラを印刷していたことになる。64 折版が 1 タイトル、32 折版が 3 タイトル、24 折版が 1 タイトル、16 折版が 6 タイトル、判型が不確かなものが 1 タイトルである。出版年別に判型を見ると、徐々に小さなものを作るようになったわけではないとわかる。1494 年以降に印刷された詩篇と時祷書のうち、6 タイトルの出版者は Giunta である。

また、2 タイトル 2 点の全ページの画像と 7 タイトル 7 点の一部ページの画像を取得することが出来た。問い合わせ先の図書館で一部、または全部のデジタル化が不可能な理由として、製本がきついため傷めずに複写が不可能なためという理由が最も多く、次に小さすぎてデジタル化が難しいためという理由だった。更に 1 タイトルの木版画の画像のみが Essling[8]に含まれていたので入手した。

2．タイトルごとの印刷技術の特徴

Emerich のミニアチュア・インキュナブラに使われている活字の種類を第 2 表にまとめた。8 種類の小文字と 12 種類の大文字があり、全てゴシック体である。2 折版ではほとんど、4 折版でもあまり使われていない。一方で 8 折版と同じ文字がよく使われている。小文字の 16*:59G や大文字の kk などのように専用の活字も存在した。

第 2 表　使用していた活字と判型

活字	版型							高さ
	2	4	8	16	24	32	64	
1:46G			2	2			1	46※
2:63G			3			1		63※
3:66G		2	2			2		55※
5:92G		3		3				92※
8:105G	1	2			1	1		105※
9:130G		1	2	2				130※
13:52G.	1		1		1			52※
16*:59G						1		59※
e		5	1	4				7
f			3		1			9
g		2	6	1		3		5
h		2	6	1	1	3	1	2
m			1	1				92?
n			2	3	1			29
o			1	3				17
p			2	1				12
aa		3		4	1	1	1	0.75
kk						1		15
rr					1			20
ss						1		13

※は 20 文字あたりの高さ

1 つのタイトルに使われている活字の種類は小文字が 1~3 種類、大文字が 1~6 種類である。出版年などによる偏りは見られなかった。

全てのタイトルが赤黒の 2 色刷りとなっている。赤い文字と黒い文字を別々に印刷した際に正確に位置を合わせられていないために、ずれたページもある。ずれの大きさは最大で文字半分程度で、文字の大きさを考えると 2 ミリ程度である。Emerich による他の大きさの 2 色刷りの印刷物のうち、すでにデジタル画像が公開されている 9 タイトルと比較したところ、ずれの大きさはあまり変わらないことがわかった。

それぞれのタイトルで使われている挿絵を比較したところ、ページ全体にまたがる大きさの木版画と、それよりも小さなページ 4 分の 1 程度の大きさの木版画があり、1 つのタイトルにはどちらか片方が使われている。また、ih00379100 と ih00383200 で同じ木版画が使われている[10]ほか、他の印刷者との関係では、Hamann に関する過去の研究で Hamann が 1493 年に出版した時祷書で使われた木版が、Emerich が 1496 年 7 月と 1497 年 8 月に出版したミニアチュア・インキュナブラの時祷書(ih00378700 及び ih00388800)に使われ、さらに 1497 年 12 月の Aldo Manuzio によるギリシア語のミニアチュア・インキュナブラの時祷書でも使われていることがわかっている[11]。

3．タイトルごとの内容の特徴

内容はいずれもキリスト教に関連するものである。内訳は聖務日課書が 2 タイトル、詩編が 1 タイトル、時祷書が 8 タイトルである。

聖務日課書のうち、Thomas Donatus によるドミニコ会向けの聖務日課書は1492年に印刷され、全ページにわたって赤黒 2 色の印刷である。後半には行間をあけて印刷された部分があり、楽譜を手書きで書き加えるためのスペースだと考えられている[5]。もう一方の Ludovicus Brognolus によるフランシスコ会向けの聖務日課書は 1494 年に印刷され、内容はドミニコ会向けのものよりも多くなっている。先行研究において楽譜のスペースについての議論はなされていないため、今回画像が入手できなかったので確認はできないが、楽譜のためのスペースはないと考えられる。

詩篇は木版画を 1 つ含んでいる。なお、一部の画像が得られた 1 点(英国図書館所蔵)は 2 つの木版画を含んでいるが、不完全なものであり、木版画のうち 1 つは Emerich の印刷した他の時祷書(ih00379100 あるいは ih00383200)からとったものではないかと考えられており[9]、実際の画像からも確認できた。

時祷書はいずれもローマ式のものである。16 折版から 64 折版まで、様々な大きさがある。そのうち 3 タイトルは Emerich 単独の出版で、残り 5 タイトルは Giunta の出版である。いずれも 5 点以上の挿絵がある。

内容別に本文を見比べると、聖務日課書と時祷書のいずれも、省略記号はあまり使っていない。そのため、読みやすさにも配慮しているのではないかと考えられる。両者に差があるのは内容量である。聖務日課書では 1 ページ当たりの行数は 35 行近くあり 2 カラム組みで、使っている紙葉の数は 300 葉以上であるのに対し、時祷書は 1 ページ当たりの行数は 20 行以下で 1 カラム組み、使っている紙葉の数も 200 葉未満で聖務日課書よりも短いため、内容量には大きな差がある。それに伴って、同じ大きさの聖務日課書と時祷書では、聖務日課書の方が小さな活字を用いている。

出版年・判型別のタイトル数をみると、第 3 表のようになった。Hamann との共同印刷を終えた当初から毎年のようにミニアチュア・インキュナブラを印刷しており、一方でミニアチュア・インキュナブラばかりを作っていた年はないことから、コンスタントに毎年作っていたことがわかる。

第 3 表　出版年・判型別のタイトル数

出版年	f	4°	8°	小計	16°	24°	32°	64°	小計	不明	合計
1487	1		1	2							2
1488			1	1							1
1492					1				1		1
1493			3	3			1		1		4
1494		6	1	7	2				2	1	10
1495		5	1	6							6
1496	1	3	2	6	1	1	1		3		9
1497		2	1	3	1		1		2		5
1498	2	1	2	5	1				1		6
1499	2	1	4	7				1	1		8
1500	1	3	4	8							8
不明、それ以降	3	3	5	11						1	12
合計	10	24	25	59	6	1	3	1	11	2	72

４．個別資料からみる読者と使い方

それぞれの装丁を調べると、9 点の装丁がわかった。革装のものが 8 点で、そのうち 4 点は 19 世紀に製本されたもので、2 点はオリジナルか遅くとも 16 世紀ごろだと考えられる。革装のうち 4 点は金で装飾がなされている。時祷書のうち 1 点(オーストリア国立図書館所蔵)は表紙が銀製で、ヴェネツィア風に金で装飾されている[10]。

本文に用いられている材質は、わかっている 6 件中、ヴェラムに印刷されたものが 5 点である。ヴェラムのもののうち時祷書が 4 点であった。

画像が入手できた 9 件の版面を見ると、高価な材質である金や青を用いた彩色がなされているものが 5 点あり、いずれも時祷書である。そのうち 1 点(オーストリア国立図書館所蔵)は木版画の彩色の仕方や装丁の仕方に 1500 年ごろのヴェネツィアの手法が用いられている[10]。一方、装飾が見られなかった 4 件のうち時祷書は 1 件だけで、残り 3 件は聖務日課書と詩篇であった。

書き込みを見てみると、出版と同時期の書き込みとして、16 世紀の書体によるトレビゾに住む人物の署名が時祷書に、フィレンツェの修道僧の署名が政務日課書にある。後日の書き込みとして、19 世紀の購入記録と当時のイギリス人の蔵書票が張られているものもあった。これらの書き込みからは、出版された当時はイタリア半島の北部で使われていたことが推測できる。

Ⅳ　結論

１．Emerich の印刷技術

挿絵には木版画を用いており、同じ時期でも複数の種類を使い分けている。また、初期に共同印刷をしており、ミニアチュア・インキュナブラ 8 タイトルを印刷した Hamann や、小型本の印刷で有名な Aldo のようなヴェネツィアの他の印刷者と同じ木版を用いていることがあった。

用いている活字は 8 折版と共通するものが多いが、ミニアチュア・インキュナブラ専用のものも少ないものの存在する。2 色刷りのページで活字を組む際や印刷する際のずれもそう大きくないことから、高い技術があったと想定される。その一方で、Emerich の印刷物には楽譜を含むものが多いにもかかわらず、ミニアチュア・インキュナブラでは楽譜を印刷せず、楽譜の為にスペースをあけているものが 1 タイトルあるのみであった。小さなサイズでは楽譜の印刷が難しかったことを推測できる。

毎年コンスタントに出版していることと、聖務日課書や時祷書はカレンダーを含んでいることから、毎年ごとの版の需要があったのではないだろうかと考えられる。専用の活字もあることもあわせて考えると、Emerich の顧客にはミニアチュア・インキュナブラを求める人がおり、そのため Giunta も印刷を依頼していたのではないだろうか。Giunta は詩篇と時祷書の出版にのみ関わっているものの、通常サイズの聖務日課書も出版していることから、聖務日課書を避けているわけではないと考えられる。

２．想定される読者と利用

想定される読者は北イタリアに住む聖俗のキリスト教徒である。聖務日課書は聖職者のためのもので、実際に現存する書き込みからも修道僧の利用がうかがわれる。現存するものには装飾がなされておらず、美術品というよりは実用品として用いられていたと考えられる。

一方、時祷書は一般の信徒のためのものである。内容は全てローマ式のものであることから、これもイタリア半島での使用を考えたものである。印刷の為に紙ではなく羊皮紙を利用していることや、1 件を除いたほかは全て金などを用いた豪華な装飾がなされていることから、ある程度裕福な人間が購入していたと推測される。

謝辞

本研究は三田図書館・情報学会研究助成金の助成を受けています。資料の複写及び情報提供をいただいた各図書館の担当者の方に心より感謝いたします。

引用文献

1. McMurtrie, Duglas C. Miniature Incunabula. The News Letters of the LXIVMOS. 1929, Vol. 19, P.5-11
2. Welsh, Doris V. The History of Miniature Books. Albany N.Y., Fort Orange Press, 1987, 156p.
3. 西川和. “ミニアチュミニア・インキュナブラの出版傾向”. 三田図書館・情報学会研究大会発表論文集 2014 年度. 東京, 2014-10-26, 三田図書館・情報学会, 2014, p.13-16.
4. Duggan, Mary Kay. Italian music incunabula: printers and type. University of California Press, [1992?], 323 p.等より
5. Duggan, Mary Kay. Italian music incunabula: printers and type. University of California Press, [1992?], 323 p.
6. The British Library Board. Incunabula Short Title Catalogue (ISTC). http://www.bl.uk/catalogues/istc/index.html(参照 2015-10-16)
7. Staatsbibliothek zu Berlin. Gesamtkatalog der Wiegendrucke. http://www.gesamtkatalogderwiegendrucke.de/(参照 2015-10-16)
8. Essling, Victor Masséna. Les livres à figures vénitiens de la fin du XVe siècle et du commencement du XVIe. Maurizio Martino, [198-?], 3vol.
9. British Museum. Catalogue of books printed in the XVth century now in the British Museum, Trustees of the British Museum, 1962-, 13vol.
10. Unterkircher, Franz. Ein Inkunabel-Unikum der österreichischen Nationalbibliothek und dessen eigenartiger Einband. Gutenberg Jahrbuch, 1957, Vol. 31, p.102- 104.
11. Piazza, Clementina. “Digital resources for the study of incunabula: Johannes Hamman's illustrated editions of Horae: ad usum Romanum”. El pasado ajeno: estudios en honor y recuerdo de Jaime Moll. Academia de Cronistas de Ciudades de Andalucía, 2012, p.21-p.37.